

京都よみ

短歌

神谷 佳子 選

へ入選

全集も古紙と並べてゴミを出す若き血気と別れし刹那

宇治 浜岡 学

【評】 貪るよ様に読み高価な全集もそろえてしまつ時期があり年経て処分する決断をいい共感する。

鳶職人軽がるのぼり高所に立つシャープなライン野猿のごとし

右京 東 ゆり子

【評】 比喻が的確である。ひ弱と思っていた若者を見直す瞬間でもある。

一輪のドライフラワー 薔薇の花つぶやく聴きつつ黙多きひと曰

北 蔦野 敏子

【評】 ドライになったバラの哀しみ、美しいと見るより哀れの方が染みるひと曰の繊細な思い。

へ佳作

傷口を手当てするがに椎茸の椀木の穴に菌を打ち込む

南丹 中川 文和

大寒に母ほお張る時代が来て地球は湯気を立てている

南丹 中川 優子

まっすぐに人待ち顔の黄水仙吾を待ちし子の童顔に似る

左京 根来美知代

両の手で松毬を持つリスは二足歩行に急ぎ駆けゆく

宇治 笹井 陽紹

ふるさとの野山恋しくなつかしく望遠鏡でじっと見詰

める

息子より奨学金を六年分返し終えたとメール届けり

亀岡 椋梨 景雄

「此処よこ」妻の片手が右左運転なしつつ笑顔で返す

伏見 井関 一朗

舞鶴 福林 弘祐

竹中 宏 選

俳句

へ入選

葉牡丹の親の笑ひに子の笑ひ

西京 古川麻美子

【評】 巧手の句ではない。巧手でないから生まれだ、裏表のない楽しい句。不意に飛んだヒット。

冬至過ぎ次第に長く心の灯

亀岡 椋梨 景雄

【評】 このナイーブな発想にも、臆病な芸達者なら避けるあやうさがある。成否まさしく紙一重。

女正月縁に置きある妻の杖

与謝野 牛田 弘作

【評】 未熟の作でない。ならば「置きある」は、さらに緻密な描写を望んでよい余地があろう。

神水の凍つれば神の尊けれ

伏見 北村 峰月

鳴りや金銀ちらすお品書

城陽 森下まゆみ

オカリナに老いの身揺する日向ぼけ

左京 川端 緋

修行僧暮色いつまで落葉焚く

八幡 小西 翠声

ラガーまたラガーの上になだれ込む

伏見 反田紀代子

蒲団干す陽光全てかき集め

宇治 平林 直美

探梅へ若草山のふもと過ぎ

木津川 田中 茂治

点眼の後のうるみに寒雀

京丹後 上羽 聡子

竹林の朝の香を嗅ぎ春近し

八幡 前田 重明

ひとり風呂柚子の袋を弄び

宇治 林 靖夫

川柳

中村 牛延 選

へ入選

猫眠る孫のパジャマのぬくもりに

南丹 河野 都

【評】 思わず微笑が浮かぶ冬の情景。猫の夢には大切なご主人様のお孫さんの姿が。

臥す妻に鏡に写す臙月

伏見 山崎 秋義

【評】 実景の描写としては舞台が出来過ぎの感じがします。夫婦愛の句としていただきました。

受験の子吉と出るまでみくじ引く

西京 古川麻美子

【評】 お気持ちばかりですが、占い・おみくじは一回限りと教えられました。努力賞の句。

両親の笑顔の中へ里帰り

宇治 橋本 隆

桜には何も責任無いものを

与謝野 千阪真知子

看護師の声優しくて釘を刺す

京丹後 木下 正己

春めいて走り出しそな赤い靴

舞鶴 武藤 安弘

閃いた名句長湯で汗となり

京丹後 山中 貞一

親の歳越して迎える春彼岸

精華 熊倉 勝彦

教わりし路に迷って梅匂う

宇治 木津 遊々

初日の出祈る心が集いくる

左京 根来 滋

封筒に迷い迷ってメを書き

左京 桑原 宣彰

投稿規定

はがきにそれぞれ短歌5首、俳句、川柳5句以内。題は自由。住所、電話番号、氏名と短歌・俳句・川柳を明記し、〒604・8162 中京区烏丸通六角下七観音町630、読売新聞京都総局文芸係一で随時受け付けています。既発表作の投稿や二重投稿は厳禁です。